

出して来るものである」というような聖書解釈観（私には、Kluxen 教授がこのような前提に立っておられるような気がしてならないのだが）、ドイツ観念論につながるような聖書解釈理解は、私にはどうしても馴染めない。むしろ私は、観念論によって矯小化されたものとは異なった方向にこれからの聖書解釈・創世記解釈の可能性を求めたい。ヨーロッパ人ではない我々が、これからの聖書解釈にもし寄与する所があるするなら、それは正に、この「概念に対する感覚の違い」にあるような気がしてならないのである。

## 意見

## 天地創造の光と影

山本 巍

『創世記』をめぐるシンポジウムでの質問は、創造は神の完全性の一部であるか、ということであったので、それに関連したことを記して補足しておきたい。

「初めに神は天と地を創造した」の「初め」は文字通りであって、その「前」のない「初め」である。つまりは過去のことでない。過去の時ならば、いつであれその「前」がまだあるからである。従って「初め」は無限に昔の過去ですらない。こうして「初め」はズラーと引き伸ばされた時間軸上のいかなる過去でもない。とすれば、「初め」は「今、ここ」ということではないか（「神代在今、莫謂往昔」）。創造の朝の曙光が「今、ここ」にあるということではないか。しかしそれは無条件の真実ではない。天地はあれども、「天地あれ」という創造の言葉は聞こえていないからである。もし「初め」が「今、ここ」であるなら、天地万物創造の秘密が、「今、ここ」に髪の毛一筋の曖昧もなく露に現れ見えていなければならない。しかしそうになっているだろうか。聖書は天地創造の直後、「善し（美しく）」と神が祝福したと伝えている。そうであれば、人間も天地も原初から救われているはずである。全ては明るく透明になっているはずである。しかし天地は自然と人工の暴力に蹂躪され、無数の人が祈りも願いも空しく無惨に倒されている事実は覆いがたい。世界の現実はいくらかの幸運と多量の不運と悪と悲惨に包まれているのである（エンペドクレスの「憎」を思い起こす）。創造は神の完全性の一部であるか、という問いが生まれる所以である。それと

も天地創造は「第二級の神」の業であるのか。トマスは、創造を巡る三つの誤謬の一つ、創造の原因が善いもの、悪いものそれぞれにあるとする誤謬に対して、「初めに (in principio)」は「子において (in Filio)、即ち知恵において」を意味するとしているが (*Summa Theologiae*, Iq. 46 a. 3)、それだけでは説明になるまい。

「天地あれ」という神の言葉は聞こえないとしたが、もしも聞こえたとすればどうだろう。天地創造の秘密が明かされるであろう。しかしそれは同時に人間が死ぬということではあるまいか。アリストテレスは『形而上学』で、眼の固有の対象が光でありながら、太陽の光にコウモリの目が潰れるように、存在のあまりに激しい光輝に人間の心の眼である理性が耐え得ないとしたように (993b9-11, なお『ソピスト』254a 10-b1 参照)、あるいは「神の顔を見るものは死ぬべし」(『出エジプト記』33.20) とあるように、神の秘密がそのあるがままの全体として人間に明らかになるなら、人間はこれに耐え得ないであろう。真理のあまりの苛烈さは人間の手にも余るのである(ダマスコ途上のパウロが盲目になったように)。人間には人間に耐えうる程度に薄められ弱められた光しか相応しくない。としたら、創造そのものに〈遠み〉が本質的に孕まれていることになるのだろうか。天地も自然も人間も存在している、と創造の結果が、神の創造の言葉は聞こえないまま与えられているだけなのである。従って神に出会うことがもしも人に生起するとすれば、〈遠み〉を孕む世界が「全体」として消滅してのことであり、それは「神、光あれと言ひ給いきに、光ありき」という創造の朝に等しい。

しかし神の天地創造の「初め」は、「今、ここ」の意義を担っているとすれば、それは「連続創造 (creatio continua)」にも似て、ただわれわれの極みなき〈近み〉に、創造そのものに孕まれている〈遠み〉を刻々に消す業を含蓄すると見える(「わたしの父は今も働いておられる。だからわたしも働く」ヨハネ5, 17)。つまりは創造をそれだけで完結した「物語」にしてはならないということではなからうか。

---